

冬のアリ

加地 尚武

七日間の創造のあと、神はできあがったばかりの世界をアリたちに与えた。神は自分を見上げる数十億の無表情な瞳に向むかつて、こう語りかける。

「この世界の富のすべてはおまえたちのものだ。森の木々も緑なす平野、山の頂から深海に至るまで、そして、そこに住まう地を這うもの、泳ぐもの、空を舞うもの、すべての生けるものを捕らえ、食してよろしい」

大盤振る舞いというべきである。アリたちの夕餉になるべき他の生き物に比べれば。——つまりるところ、神はアリたちがお気に入りなのであった。その生き物の甲殻は鋼のように鈍く光り、感情の無い巨大な目は黒玉のように丸く、触角はイバラのようである。しかし、嫉妬深く気むずかしい神にとってなによりも大切なのは、被造物の見てくれではなく「従順さ」なのだ。

そしてこの黒光りのする虫たちはこのうえもなく従順なのである。彼らには意志もなく個性もなく、自我すらなかった。彼らの小さな頭蓋の中にあるのは、ただ狂おしいまでの食欲と、集団への忠誠心だけである。

アリたちは神から授けられたものすべてを、その強靱なあぎとでいかに効率よく噛み砕くかという課題に一心不乱に取り組んだ。そのためにはどんな努力もいとわなかった。よりよく消費するために道具を発明し、火を熾すことをおぼえた。

森を焼き、山を穿つ。川の流れを変え、潤った土地に麦の種を蒔く。そして何度も何度も、

冬のアリ

絞り尽くすように収穫するのだ。栄養を含んだ土壌が老婆のように痩せて砂漠になるまで。

アリたちがこの地球を埋め尽くすほどに増えたことにより巣穴と巣穴の距離が縮まり、争いが絶えなくなつた。アリたちは敵の巣穴のアリを殲滅するまで一致団結して戦つた。

燃える石、燃える水の発見はアリたちをよりいっそう貪欲にさせた。彼らはもうもうたる煙を吐き出す機械の力を借りて大地の形を変えていった。彼らの身体からすれば途方もない大きさの石の都を築き、ありあまる食料を作り出しては腐らせて家畜の餌にした。彼らの作り出す熱は、ホコホコと湯気を上げながらエントロピー増大の法則に従つて、あまねく世界を満たす。彼らの造物主が言つたとおり、この世界のすべては彼らのものであつた。

まさに夏である。

夏はアリたちの季節なのだ。絶え間なく降り注ぐまばゆい陽光のもとで、アリたちは嬉々として黒い甲冑を輝かせながら、互いの触角をもぎ取り、頭蓋を噛み砕きあつていた。

そんなあるとき、夏の空の中心で輝いていた太陽に、黒点がひとつもなくなつた。それまでは愛嬌のある娘の鼻についているホクロのように、燃えさかる円熟した星を飾るように存在していた黒い点が、まったく現れなくなつたのである。その年、ひどい干ばつがアリたちの穀倉地帯をおそつた。かと思ふと、世界のいっぽうで、かつてないほどの巨大な嵐が豪雨を降らせ、洪水を引き起こした。

次の年、ほとんどの穀物が不作となつた。長年の酷使により土地がやせ細つたことに加え、なによりも日射量が不足していたのである。次の年はもっと悪かつた。そして次の年も。さらに次の年は凶作と言つてよかつた。穀物の価格は釣り上がり、多くの巣穴でさわぎが起きた。

さらに次の年。アリたちは、この世界の両極を覆う白い氷が低い緯度に向かつてにじり寄るように前進し始めたことに気がついた。その現象は、勤勉さと忠実さだけが取り柄のアリたちにさえ不安を与えずにはおかなかつた。もしかしたらほんとうは、自分たちアリは神に愛され

ていないのではないか？ 彼らは刺だらけの触角を触れあわせながら、そう囁き合うのだった。

いまや氷床は白癩のように両極からアリの住処に向かってひたひたと押し寄せる。白く輝く氷は太陽からせつかく届いた貴重な光を宇宙にすげなくはね返す。

——こうして、冬がやってきた。

「アリたちはどうなったの？」少年はボロボロになったコートの際をたぐり寄せながら、かすれた声で言った。

「戦争を始めたんだ」少年の父は頭を覆うフードの下から、低い声でこう答える。

父と子は他の難民たちとともに、数十年も使われなくなった高速道路を中央分離帯に沿い西に向かって歩いていった。別府のジャンクションから、ずっと歩き通しだった。干上がった湖のようにひび割れた道路の脇には、何人かが横たわっている。休んでいるのか、あるいは死んでいるのか、ぴくりとも動かない人もいる。

まだ陽が高いというのに少年は怖くてたまらなかった。死体を見るのは慣れていたが、霊魂やお化けのたぐいが怖くてたまらないのである。だから彼はもう何度も聞いたはずの「アリのお話」をねだるのだった。

突然、少年は立ち止まり、細い体を二つに曲げて咳き込んだ。咳は一分ほど続いた。「……アリたちはなぜ戦争なんかはじめたの？」ようやく治まると少年は涙を浮かべて、うめくように言った。

「あとで……」やせた中年男は息子の手を握りしめ、下を向く。

少年は父の行動の理由に気がついた。パーキングエリアを示すぼろぼろな看板の脇に九州鎮守府軍の監視塔があったのだ。少年は口をつぐみ、父の後を追うようにひたすら歩く。

父と子は分厚いコンクリートで築かれた監視塔の真下にさしかかっていた。融雪剤で真っ黒になった舗装の上に、さらに白い粉のような雪が降りかかっていた。鳥かごのように錆びついた有刺鉄線に取り巻かれた日本人の兵士が監視塔の上から、重い足取りで進む人の群れを見下ろしている。父親は少年にそっと目配せをした。二人は大勢の人々の列に混じって監視塔の前をやり過ごす。少年の胸の中で咳の塊が古びたディーゼルエンジンのようにぶるぶると震動している。

「アリたちは——」監視塔から十数メートル離れたところで少年は父親の痩せた背中に向かって声をかける。

そのとき、彼らの頭上を二機の人民解放軍の垂直離着陸機が鹿児島の方角に向かって飛び去っていった。

「親米ゲリラでもいたのか？」列の中の一人が灰色の空を見上げながら小声で言った。

「……九州にや、いや、日本にやゲリラなんて、もういないよ……」腕に灰色の包帯を巻いた老人が立ち止まり、その言葉を発した男に向かってささやく。「わしは名古屋で『プロアム』に間違われて撃たれたんだ。そんなものいるはずないのにな」その老人は包帯を巻いた腕を振ってみせる。

「『ナゴヤ』なんてもんがまだあったのか」べつの人物の声が出た。

「まだ、何人かは住んでるよ。まだな」老人はそう答えてよろよろと歩き始める。

無秩序な難民の隊列は、汚れた雪がうっすらと積もる高速道路をゆっくりと進んでいた。六月の冷たい風が彼らを追い立てるように後ろから吹いている。列の前方から激しい赤ん坊の泣き声が響いていた。

高速道路の両脇には焼け焦げた山々以外なにもない。少年は遠ざかる監視塔に向かってそつと振り返ってみた。機関銃の銃身が錆びた釘のように灰色の空に突き出ている。

——いますぐ兵隊さんになれたらいいのに。ふと少年は思った。兵士になれば腹いっぱい食べることができるとし、こんなふうには咳をしながらかき回らなくてもいいのだ。いつだったか、少年がそう父に漏らしたとき、父はひどく腹を立てた。「おまえはアリか人間か？」と言って、横を向いたのである。

父さんは兵隊がきらいなんだ。少年はそう思った。そのとたん、咳の塊が胸を突き上げる。少年は手袋をした右手で口を押さえた。

「……その子、無理じゃねえか？」腕に包帯を巻いた老人が、父に向かってそうささやくのが聞こえた。少年は唇を噛み締めて耳を澄ませる。

「そんなことはない。大丈夫です」父の低い声が頭上から響く。

ぼくはダイジョーブなのだ。父さんがそう言ったから。少年はぼんやりと考える。ふと、老人と目が合った。白く濁った瞳が見下ろしている。少年は小さな咳の塊をはき出した。老人はすぐに目を逸らす。

ぼくはダイジョーブだ。少年は歩きながら高速道路を挟むようにしてそびえる山の老婆の肌のような斜面を眺めていた。歩きたびに体重が増しているかのようなだるさを感じるので、べつのことを考えることにした。アリってどんな生き物なんだろう？少年は父の寓話に出てくるその生き物の姿を思い浮かべてみる。ぼくは、生まれてから「アリ」というものを見たことがない。そのことに気がついたとき、ふしぎな感じがした。

しばらく歩くと、延々と続く人々の流れが徐々に遅くなっていく。少年は顔を上げ、前を見る。人の列は高速道路から下る一本の狭い道に向かって続いているのだ。無秩序だった行列は次第に整然となり、廃屋になった料金所のゲートを過ぎて、くすんだ灰色の市街地へと入っていく。

朽ち果てた建物が並ぶ間を汚れて疲れきった人々が途方に暮れたように歩いている。少年は

やや前のめりになるようにして、すり足で進んだ。足を上げて歩くのがつらかったのである。

「……もうすぐだ」父の声が聞こえてくる。なぜか水の中で歪んでいるような声だった。

「着いたの？」少年は言った。

「もうすぐだよ。着いたらまず腹一杯メシを食って、風呂に入れてもらおう」父は言った。

「風呂？」さいごに風呂に入ったのがいつなのか、少年はぜんぜん思い出せなかった。

「ああ、そして暖かい布団で眠るんだ」父は自分に言い聞かせるように言う。

少年は答えずに立っていた。父の言うような待遇を受けるには、まとまった金——つまり人民解放軍の軍票——が必要であるということが少年にはわかっていった。そして、父親がほとんど無一文であるということも。だが、少年はなにも言わなかった。頭がボーツとしているのと、金のことを口に出してしまうと、粉雪のようにもろい何かが消えてしまうような気がしたからだった。

「あの山の向こうに見えるのが、ここのコロニーの地熱発電所だ」父親がふいにある方向を指さした。遠くのはげ山の中腹に、四角く醜い建物が見える。

「煙、出てないよ」少年は言った。

「前のコロニーにあったやつとは違う。こっちの方が設計が新しいんだ。ロスを減らして効率よく熱を利用している」父は言った。

「ふうん……」少年は曖昧にうなずいた。地球の重力が十倍になったような感じがしていた。額に手をやる。ぼくの熱も発電に使えるかもしれない。それは、気の利いた冗談のように思えた。だが、口に出すことはなかった。顔を上げて口を開くのがひどくおっくうだったからである。

無人の町並みをのろのろと歩くうちに、大きな鉄条網で仕切られた場所が見えてきた。鉄条網の向こうには、鈍い銀色に輝いて宇宙船のように見える水耕栽培所と、居住区らしきドーム

型の建物があつた。少年が驚いたことには、まだ夜になつていないのに、その建物から明かりがもれている。電気の光を見るのは一週間ぶりだつた。その場所の門にあたる部分に、道中にあつた監視塔よりも何倍も大きな塔がそびえていた。

トシオはのけぞるようにして、その錆だらけの塔を見上げた。錆で赤茶けて見えるが、もとは円筒形の鉄の塔らしい。塔の中腹に簡体字の中国語のスローガンらしき言葉が、乾いた血のような色で大きく描かれている。

人の流れが止まつた。そして、なかなか動き出さない。夕刻が迫り、あたりが薄暗くなってくる。

こんなふうになつて立っているより、歩く方がいいのに。少年は父の語る奇怪なアリたちの物語のことを考えた。父さんは人類のことをアリにたとえて言っているんだ。そんなことはわかつている。一センチにも満たない小さな虫が火を燃やしたりできないもの。そんなことはわかつている。冬が来て戦争をしたというのも、ぼくが生まれる前にあつた中国とアメリカの戦争のことをたとえているんだ。そんなことは――。

「……大丈夫か？」

痩せた父の顔が目の前にあつた。手袋を外して手を少年の額の上に置いている。

「どうしたの？」少年はかすれた声で父に言った。

「ちよつとブーツとしてたんだ。この人に名前を言うんだ」父はそう言って、いつの間にか横に立っている男に手を振つた。

「トシオ……」少年は答える。

「氏名と年齢を言うんだ」父はうながすように言う。

「ムコウダ・トシオ。十一歳……です」

「トシオね……」その人物は、そうつぶやきながらトシオの顔を見下ろしている。黒いズボン

に、囚人のような数字が描かれた茶色のコートを着ていた。見るからにコロニー行政の役人のようである。

「この子は、感染しているようですね」その男は言った。

「まっつてくれ。せめてちゃんとした検査をしてくれ。妙なウイルス感染症じゃない。この子はただの風邪だ。満足に食事をとらせていないから、なかなか治らないんだよ。四十キロも歩いてきたんだ。頼むよ！」父は役人に詰め寄った。

男はできませんと言いながら首を振り、その場を立ち去ろうとした。父はその男の袖を引っ張るようにして食い下がる。

父と役人の言い争いを聞きながら、トシオは道の脇にあるコンクリートの塊の上に座り込んだ。じつと立っていることができなくなったのである。まるでコンクリートの一部になってしまったかのように、なんの感情も沸いてこない。

父と役人の声。無数の人々の足音。赤ん坊の鳴き声。怒声。それらの音たちが溶け合って流れだし、トシオのまわりを取り囲んだ。まるで音ででき金魚鉢の中にいるみたいだった。気がつく父に抱きかかえられるようにして狭い道を進んでいた。コロニーから離れていく方向のようだ、と思った。農場の銀色の建物が遠ざかっているからである。

コンクリートの壁が片方だけのブックエンドのように突っ立っていた。雲の向こうから注ぐ太陽の光が淡い影を地面に投げかけている。その壁によりかかると、複数のテントが張られていた。テントの奥には顔を布で被った人々が座っている。何かを叩く音、携帯用自家発電機のたてるカタカタというギアの音、人間のうめき声、咳。それらの雑音が潮騒のようにあたりに響いている。

「……ここでじつとしてるんだぞ」

トシオは、廃墟と化したとある建物の床に座らされた。父親は一番上に重ね着をしていた

コートを、力尽きたように壁にもたれかかるトシオの膝にかけてやりながら、そう声をかけた。トシオは顔をあげて父親を見る。

「……あのコロニーから、食べ物や着替えを持ってくるよ。もちろん薬もだ。父さん、すぐに帰ってくるから、この場所で暖かくして待ってるんだ」父は言った。

父の瞳が弱々しい光の中で揺らいでいるように見えた。トシオはうなずいてみせるために頭を上下させる。その仕草ひとつするのにも、疲労感をおぼえた。

「空腹が我慢できなくなったら、ここに入れてあるこいつを口に含むんだ」父はそう言って、汚れたハンカチにくるんだ合成肉のジャーキーのわずかなかけらをコートの内ポケットに入れてみせる。

「……」トシオはもう一度力無くうなずいた。

「熱があるんだから、じっとしててるんだぞ……」そう言いながら父は立ち上がり、丸くなったトシオに背を向けようとした。

「そうだ」父は振り返って一張羅のジャケットから一冊の手帳を取り出した。「これを持っていくくれ」父はそう言いながら、黒い合成皮革の分厚い手帳をトシオの膝の上に置く。アリのちの物語もその手帳の中に書かれていた。トシオは手帳から顔を上げて父の顔を見て、こう言った。

「……いつ帰ってくるの？」

「すぐに帰ってくる。すぐに」そう言って父は何度か振り返りながら、雑然とした通りに出て行った。それから二十年もの間、トシオは父と会うことはなかった。しかし、廃墟の壁にもたれかかった少年はそのことを知るよしもなかった。

ほどなく夜がやってくる。

暗くなってもいっこうに父が帰ってこないの、トシオはそつと目を閉じる。まぶたの裏の

暗闇の中からいろんな声がささやいてくる。なにを言っているのかよく聞き取れない。

寒かった。

たまらなく寒かったが、体中を包む疲労感が勝った。トシオの意識はゆっくりと遠ざかっていく。

干上がった川底のような荒廃した高速道路を兵隊アリの列が並んでいる。触角のふれあうカシャカシャという音を響かせながら。

明るい空から降ってくる無数の紙吹雪。

赤い光と青い光が交互に目を射る。

「……生きてたのか？」

誰かの声でした。父親ではない。甲高く、ずるがしこい動物を思わせる声。

トシオはゆっくりとまぶたを開ける。

皺だらけの、尖った顔があった。オレンジ色の光に照らされたその顔は、凶鑑で見たキツネそのものだった。つり上がった右目がトシオを見つめていた。左目は、治りかけの傷口のようにゆるく閉じられている。茶色い皮のジャケツトに、赤い星のついたオリーブ色の帽子を目深に被っていた。

その人物は眠っていたトシオから剥ぎ取ったのか、父がかけてくれたコートを片手に持ち、父がくれた合成肉のジャーキーを包んでいたハンカチを、もう片方の手に握りしめている。

「……まだ生きてるんなら、やっぱ、これが要るよな」キツネのような顔をした男は、口をもぐもぐさせながら父のコートをトシオの膝のあたりに無造作に放り投げた。

「……」トシオは顔を上げたままだった。

「なにボーっと見てるんだ？ ……コート、返さなくてよかったのか？」男は言った。トシオの目にはその人物が童話の中の登場人物に見えるのだった。子羊をだます悪いキツネ、片目の

キツネ。

「……なんでもないです」トシオはそう言って視線を落とした。黒っぽいホコリに覆われたコンクリートの床を、オレンジ色の光が斜めから照らしていた。ペダル式の人力発電機の音が数メートル先から聞こえてくる。吐く息が白くなるほど、ひどく寒かった。

「これ、おまえのか？」

顔をあげるとキツネが父の手帳をトシオに向かって突き出している。トシオはうなずいた。

「……わけわからんが……こう、なんとなくおもしろいな……。お前が書いたんじゃないよな？」キツネは古びた手帳をパラパラとめくりながら言った。

「父さんが」トシオは素直に答えた。

キツネは片方の眉をつり上げる。「お前のオヤジは科学者かなにかか？」

トシオはキツネの言葉にとまどった。「科学者」——それがどんなものを意味するのかわからない。記憶にある父は、食べ物を持ってきてくれるひと、というものだった。「……前の、もうひとつ前のコロニーで、役人か何かをしてた」トシオはようやく言った。

「二つ前ってことか。どこだ？」

「カルイザワ……」トシオは答える。

「カルイザワで役人ねえ……なんで出てきた？ 放射能か？」

「……母さんが死んだから」トシオは答えた。

「……ふうん」幸いなことにキツネに似たその男はそれ以上トシオに質問をしようとしなかった。指先で父の手帳の繰っている。彼はノートのあるページで指を止めた。「この……『ヤンガー・ドライアス事件』てなんだ？」

トシオは上を向いてその言葉を思い出そうとする。そのとき、穴だらけの天井が見えた。大勢の人々の気配がした。

「ここ、どこ？」トシオはつぶやくように言う。

「あの愛想のないコロニーに受け入れてもらえなかった連中の集まる場所だ。残飯や廃熱に群がっているアリみたいなもんさ」そう言ってキツネは薄い唇の端に笑みを浮かべる。「関西のコロニーがみんな若狭湾の放射能でやられてからこっち、九州のどこのコロニーも厳しくなってるんだ。……おまえはオヤジに取り残されたんだな？」

「……父さんはすぐに帰ってくるって言った」トシオはゆっくりと言い返す。

「……なるほどねえ」キツネは大げさにうなずき、腕にはめた大きなデジタル時計に目をやると、トシオの前に腰掛けた。「……まだまだ時間があるから、おれと話をしようぜ。目を覚ましてるかぎり生きてることだからな。おまえはおれが起こしてやらなきゃ、たぶん死んだところだ……。で、おれの質問にはいつ答えてくれるんだ？」キツネは言った。

「え？」

「だから、ここに書いてある『ヤンガー・ドライアス事件』だよ」

トシオは懸命に記憶の糸をたどる。山口のコロニーにいた頃に、父が言っていたことを思い出す。「……暖かい気候から、とつぜんものすごく寒くなることだって、父さんが言ってた。

……大昔から何度か起きたって」トシオは目の前に座っている奇妙な男に懸命に説明する。父が残したわずかな食べ物を取られてしまったにもかかわらず、そのキツネに似た男と会話を交わしていると、眠る直前まで感じていただるさが和らぐような気がしてきた。

「じゃあ、いまも、このヤンガー・ナントカなのか？」キツネは言った。

「ううん」トシオは首を振る。トシオは父の言葉を思い出す。「もつと悪い」父は口癖のように言っていた。もともと起きていた気候変動に加えて、太陽活動の突然の低下により地球は暴走を始めたのだ。「……『アリたちの夏』は終わったんだ」父は寒冷化の話を、いつもそう締めくくるのである。トシオは目の前のキツネに似た男に父の言葉を繰り返してみせた。

キツネは壁にもたれかかり、あぐらをかいた膝の上にはおづえをついてトシオの話を聞いていた。発電機のペダルの音が響いてくる。

「……滅びるのはなにもキリギリスだけじゃないんだな」トシオが口をつぐむとキツネはそう言っただけで、前歯を見せて、皮肉な笑みを浮かべる。

「え？」

「知らないのか。『アリとキリギリス』の話だよ。おまえのオヤジは、『アリとキリギリス』ってゆうイソップ童話をもじって、このお話を作ったんさ」キツネは手帳をポンと叩いた。「わかるか、ぼろぼろ」キツネはトシオに尖った顔を近づける。

「毛むくじやらのサルから進化して以来、兵隊アリみたいなのがむしやらに働いてきたものな。人間は」キツネは皮肉な笑みを浮かべる。「——おまえのオヤジは今よりもっともつと寒い

——『氷河期』になるって言うんだろ？」

トシオはこっくりとうなずく。

「……ヨーロッパもロシアも、コロニー以外にやほとんど人の住めない場所になってきている。おまけに太平洋を挟んで中国とアメリカが戦争をやったおかげで、ニッポンはこの有り様だ。たった十年足らずで百万という日本人が餓死し、原発はみんな破壊され、マトモに機能する政府は無くなっちゃった。そして占領軍の手先の鎮守府の連中だけがいばりくさってる。……おれたちはしよせんちっぽけな虫けらだから、寒くなるとアタマが回らなくなるんだ。助け合うことはできないし、限られたものを奪い合う」キツネは吐き捨てるようにそう言って、唇を歪める。

廃墟のどこかで女性が泣き叫び始めた。その声はまるで物の怪のようだった。トシオは父のコートをたぐり寄せ、丸くなる。

「……おまえ、知ってるか？ 百年あまり前にや、『炭酸ガス排出権』——つまり、ケツから

屁をひり出すみたいに二酸化炭素をはき出す権利——なんてものを売り買いしてたんだぜ」

「そうなの？」

「そうだ。そのころは人間が作り出す二酸化炭素で地球が暖かくなるなんてことが信じられていたんだ」キツネは言った。

「……どうして？」

キツネはおどけて手をひらひらさせる。「……『温室効果』だよ。あの気取ったコロニーにもあるだろ？ でっかい温室が。そのころは人間が温度を保ちやすい二酸化炭素をはき出し続けられそのまま気温が高くなると思われてたんだ。……ところが、おれたちが住むこの地球はあいにくそんなに単純じゃなかったってことだ」キツネは言った。

そのとき、一人の人物がトシオとキツネに近づいてきた。カーキ色のズボンに黒のコート、エンジ色のスカーフで顔を覆っているが、小柄な女性のように見える。

「なにやってるンさ？」その人物は低い声でキツネに言った。

キツネは首をひねってその女性に「おう」とうなずくと、「暇つぶしだ。このボウヤと」と答える。

女の目がトシオを射るように見ている。

「こんな子ども相手にべらべらと……」顔を覆った女はやれやれといった調子で首を振る。

キツネは皺だらけの顔に薄ら笑いを浮かべた。そのとき、トシオは思わずその顔に魅せられた。ずる賢く、冷酷で、隙あらば人を騙したり裏切ったりしそうな顔だ、と思った。

——この人はアリじゃないかもしれない。トシオのところに、そんな言葉が浮かぶ。

「……ちよっと耳かして」顔を覆った女はかがんでキツネに耳打ちをした。キツネは肉食獣特有の凶々しさで女の肩に手を乗せる。まるで獲物の肉づきを品定めするかのように。——ウサギだ。トシオは顔を覆った女性にこのころの中であだ名をつけた。

「ぼうや、楽しかったぜ」キツネはそう言ってその場を去ろうとした。

ウサギが細く小さな目でトシオを見つめている。ぼくになんの関心も抱いていない目だ。そうトシオは思った。そのときになって、ふいに寂しさが押し寄せてきた。

「ぼ、ぼくも連れて行って」トシオは思わずかすれた声で叫んだ。その言葉にびっくりしたのはとうのトシオだった。彼は自分自身の言葉に驚き、きよとんとした顔でキツネとウサギを交互に見た。

「連れて行くって、なに言ってるんだよ、ボウズ」キツネはあわてたように声を上げた。

「……その……」トシオは口ごもる。

キツネは皺だらけの顔に困惑の表情を浮かべていた。

「こんな子、ほっときなよ。——ほかの連中待ってるよ」ウサギはキツネの右の肘をポンと叩いた。キツネはウサギにうなずいてから、トシオに顔を近づける。

「おまえはここでオヤジさんを待ってるんだろ？ おれらと一緒に行ってしまったら、オヤジさんが帰ってきたときに困るんじゃないかねえか？」キツネはとりなすように言った。

トシオはゆっくりとうなずいた。

「じゃあな」キツネはそう言うとうサギとともにどこかへ去ってしまった。

トシオはさっきまでキツネがいた灰色の壁を見つめていた。しばらくすると自家発電機の音がやみ、かすかに差していたオレンジ色の光が消え、あたりは闇に包まれる。

怖いのでトシオは目を閉じた。

おびただしいアリの行列に向かって白い雪が静かに舞う光景が浮かんでくる。ギリギリスはアリたちのそばで横たわり、キツネやウサギや、森のクマがどこか遠くへ、まだ暖かい南へ、赤道の海に向かって歩いていく。

トシオはそんな空想に包まれながら、浅い眠りに落ちた——。

タタタタタ、タタタツ。

トシオの眠りを妨げたのは金属的な音だった。

タタタツ。タタタツ。

小さな生き物たちがさざめくように、その音は繰り返す。遠くで大人たちが怒鳴っていた。男の悲鳴と女の悲鳴が入り交じる。

トシオは目を開ける。闇の中だった。思わず目を閉じた。

つぎの瞬間、誰かがトシオの肩に手をかけて揺さぶった。トシオは必死で目を固く閉じた。なにか恐ろしいものが闇からやって来てトシオを起こそうとしているような気がしたからである。

「起きろ」何者かは低い声でそう言って、トシオの肩を強く揺さぶった。トシオは怖くなって、ようやく目を開けた。

暗がりの中で、鈍色に光る鉄の管が蛇口のように垂れ下がっていた。目を凝らすと、それは大きな銃の先端、銃口であるということに気がついた。

トシオを起こしたのは鎮守府の兵士だった。トシオは無理矢理立たされ、廃墟から連れ出された。外に出ると夜は明けかかっていた。かすかな灰色の光の中で、ぼろをまとったおびただしい男女が、兵士たちによって家畜のように追い立てられている。

トシオは彼らとともに鉄条網に囲まれたコロニーの監視塔まで歩かされた。雨交じりの強い風が人々の列に向かって吹きつける。トシオは咳をがまんしながらよろよろと歩いた。

コロニーから数百メートル離れたところにある泥と雪がまだらに混じった広場に立たされた。コロニーの中で処理しきれないゴミがうず高く積み重なっていた。

数名の兵士たちは、あわれな群衆に銃を向けたまま墓標のように無表情で立っていた。やつ

らの仲間はいないか！ 兵士の一人がゴミの山の一角を銃で示して、そう叫んだ。

人々はその銃の先に視線を向ける。

他のゴミに混じって何人もの死体が捨てられていた。トシオがいままで目にしてきた死体と同じように手足がぞんざいに曲がっている。

そのうちの一体がカーキ色の帽子をかぶっているのにトシオは気がついた。キツネの顔をした男がかぶっていたものと同じに見えた。その隣にエンジ色のスカーフを首に巻き付けた女の死体が、その男に寄り添うように横たわっている。トシオは、影絵で演じられる童話劇からキツネとウサギがそつと退場していったかのような、不思議な気持ちがあった。

「知ってるのか？」

突然、大きくて黒い兵士の影が、トシオを見おろして声をかけてきた。

トシオは思わず首を振った。

知らない知らない知らない、トシオは上半身をねじるようにして懸命に首を横に振った。瘦けた頬に残ったわずかな肉が震えるほど振った。

二十年経ってもなお、トシオは自分が風の吹きすさぶ広場に立ち、気が違ったように首を振り続けている夢を見る。

基地の営舎の堅いベッドの中で、食べ物をもらいに行くといったまま帰ってこなかった父のことよりも、自分が「キツネとウサギ」と名付けた男女と過ごしたほんのひとときのことを思い出すことがある。

ひよっとしたら、あれは風邪の熱にうなされて見た夢だったのかも知れない、トシオはときどきそう思う。だが夢ではない。それははっきりしていた。十六になり九州鎮守府軍に徴用されてから、合間に記録を調べてみたのである。あのとき、あのコロニーで盗みを働こうとした

六名の男女が軍法により射殺されたのはまちがいない。

父の生死はわからなかった。それどころではなかったのだ。三十の歳まで、インドとの戦争にかり出されていたのである。正確には、ロシア・中国全土の支配権を確立した広東省人民政府の指揮のもと、九州鎮守府軍の一員としてインドネシアで戦ったのだ。

それは、赤道の支配権を巡る戦いであった。拡大する一方の氷床は緯度五十度を越え、四十度台に迫ろうとしていた。北緯五十五度のモスクワはとうに放棄され、五十一度のロンドンはずかぬ人々が細々と暮らす極寒の世界になっていた。北半球の文明は南に向かって崩れ落ちるかのようだった。

赤道付近は日常的に巨大な嵐が荒れ狂っていた。氷床地帯との極端な温度差が気圧の谷間を作るからだだった。それでも、ただ生存するだけのために貴重なエネルギーを必要とする氷床地帯よりはまじだった。組織的な武装集団を形成できる国家——言い換えればコロニー集合体——は、菓子のかけらに群がるアリたちのように赤道に殺到したのである。

三十を超してトシオはようやく前線を離れることができた。軍曹になり、「キツネ」のように額に何本かの皺を得たが、その代わりに左膝の関節から下の足を失っていた。

除隊することを求められたが、なんとか軍に留まる道を選んだ。軍隊以外の場所で食っている気がしなかったのである。軍の中にいけば、少なくとも二度の食事にありつけることができたのだ。

新しい任地は日本だった。かつて「群馬県」と呼ばれていた場所である。真夏でも氷点下になるというひどい寒さと、中米戦争で核兵器が使用された東京からの放射性降下物にもかかわらず、浅間山系の地熱エネルギーに群がるように数個のコロニーが存在していた。トシオは幼い頃、この付近の「カルイザワ」と呼ばれるコロニーにいたはずだった。しかし、当時のことは、ほとんど思い出せない。

沖縄・九州鎮守府軍は、真っ白な浅間山を望む廃棄されたゴルフ場に野営地を築いた。トシオの所属する小隊の任務は沖縄から運ばれてくる物資や科学者たちの護衛であった。

「沖縄・九州鎮守府は浅間山を噴火させようとしている」という噂が近くのコロニー群に広まっていたため、武装したコロニー住民の襲撃に備える必要があったのである。そのため、遙か南の赤道戦線に比べて安全というわけにはいかなかった。

その朝、トシオたちは数台の無限軌道車に分乗し、前橋の補給基地から小諸に向かっていた。百年以上前に「長野新幹線」と呼ばれる列車が走っていた線路跡を利用しての移動である。

視界をかき消すほどの雪交じりの強い風が、車列に吹きつけていた。赤道付近もひどかったが、日本本土もひどい、とトシオは思う。年々悪くなる。もうこの世界には穏やかな気候の土地は無いのかもしれない。

トシオは白い雪の中に続く黒い車列を小さな防弾ガラスの窓ごしに眺めながら、ふと、二十年前前に父が残したノートに書かれていた物語を思い出した。今よりも寒い冬になったら、アリたちはどう生きればいいのか？

車列を先導する戦闘除雪車のキャタピラの音が風の音の合間に聞こえてきた。レールはどうに盗まれて無くなっていったが、百年経つたいまも線路の形は残っている。

車列は狭隘な谷にさしかかったときだった。シュルシュルというロケット弾が飛来する音がしたかと思うと、先頭の車両のコックピットが吹き飛んだのである。

隊を指揮する下士官が車から降りて応戦するように命令したため、トシオたちは銃を担いでばたばたと外に出た。破壊された車両のオレンジ色の炎が、強風にあおられて右になびいていた。両方の谷からパンパンという音が木霊のように響いたかと思うと、車両の装甲にチンチンと火花があがるのが見えた。

谷間に立ち往生したかたちのトシオたちは、谷の斜面から狙撃する襲撃者にとって格好的だった。応戦するために車両から散った兵士たちがばたばたと倒れるのが見えた。

臆病なトシオは、状況を見て取ると、義足の足を引きずるようにして停止した車両と雪の間に潜りこんだ。そして小銃を握りしめたままじっとした。その臆病さのおかげで地獄のような赤道戦線で生き延びてきたのである。

頭上でパニックになった下士官が無線装置に向かって怒鳴るように航空支援を要請するのを聞きながら、トシオのころは凧いだ湖面のように静まりかえっていた。死ぬのはちっとも怖くない。三十年にわたるおれの生が装甲車のキャタピラの下で終わるだけなんだ、けたたましい銃声と風の音の中で、トシオはそう思った。ただ、突き刺すような空腹と、足を失うような痛みにあうのが、怖くてたまらないだけなんだ。

唐突に銃撃が止む。下士官が何か叫んでいた。トシオは息を殺して待つ。待ち続ける。しばらくすると、人のけはいが近づいてきた。

襲撃してきたのは浅間山系のコロニー群の住民たちだった。トシオを含む五人の生き残った兵士たちは彼らに荒っぽく武装解除された。そして、まるでアリの行列に担いで運ばれるコロギの死体のように、目隠しをされたまま、ひとつの地熱コロニーまで歩かされた。

そのコロニーは、かつての電力線の鉄塔を解体して作られたバリケードに囲まれていた。かつては——百年以上前は——小さな温泉街だったらしい。旅館かホテルを思わせる廃墟に視線を向けながら、トシオは痒みのように記憶がよみがえるような気がした。ここが、あのコロニーかもしれない、とトシオは思った。

トシオたちはコロニー中央にある集会所の地下室で尋問を受けた。コロニーの男たちは、いや、女たちもみな殺気立っており、無抵抗なトシオたちをゴムのホースや棒きれで容赦なく叩くのだった。

彼らは中国と鎮守府軍の噴火実験計画をトシオから聞き出そうと痛めつけたが、一介の軍曹に過ぎないトシオからはたいした情報が引き出せなかった。正規の軍隊ではないため、彼らは捕虜をもてあましてしまい、資材倉庫らしき一室の床に転がしたまま放置した。

トシオは頬から血を流しながら横たわり、寒々とした倉庫の天井を眺めていた。上半身は肌着一枚、下半身は靴を脱がされていたので、ひどく寒かった。おまけに義足と膝の切断部が触れるあたりがしくしくと痛みだした。太もものあたりをビニールロープで縛られているので、血行が悪くなっているのだ。なんとかしようにも、両手は後ろ手に縛られていた。

補給部隊の生存者がこのコロニーに捕らわれていることはおそらく鎮守府軍は知っているだろう。なのにここを攻撃しようとしなのは、たんに天候が悪いのと、「実験」のために忙しいからだ。トシオは漠然とそんなことを考えていた。

トシオが横たわったまま物思いにふけっていると、倉庫のドアが開き、一人の老人が入ってきた。はげ上がった頭の後頭部にわずかな白髪が成長の悪いもやしのように生えている、小柄な老人である。

老人は縛られて床に横たわるトシオによるよると近寄ると、ゆっくりと膝を曲げてかがみ込み、トシオが首から提げているドッグタグを手を取った。

「……ムコウダ・トシオ……」老人は小さな金属製の板を手にしたまま、つぶやくように言った。

「……父さん？」

トシオは思い切って老人に問いかけた。老人はかすかにうなずき、トシオの義足に視線を落とす。

「インドネシアで負傷したんだ」

不始末の言い訳をするようにトシオは言った。目の前の父が、廃墟に自分を置き去りしたこ

とを責める言葉は浮かびもしなかった。むしろ、廃墟で待ち続ける少年の自分のもとに二十年の時間を突き抜け、父がたつたいま帰ってきたような気がした。

「また、ここに戻ってきたの？」トシオは父に言った。

「……こんな足でも軍にいななければならないのか？」父は息子の問いに答えず、そう言った。食べていくために自らすんで軍に残ったのだが、トシオはうなずいた。

「中国と沖縄・九州鎮守府が浅間山を噴火させようとしているのは、世界中の火山を使って大気を噴煙のエアロゾルで汚染し、同時に水蒸気を放出させるといふばかげた計画のための実験なんだろう……？」父は、トシオの目を覗き込みながら続けて言った。

トシオは黙っていた。父の言葉の通りだったからである。

「どうせこのあたりのコロニーは放射能でどうにもならないから……。住民全員がなにがしかの腫瘍を患っている」父はつぶやくように言う。「……日本と中国の一部の御用科学者たちがエアロゾルの『太陽光吸収効果』が『日傘効果』を上回り、気温を上昇させると唱えているから……だろう？」

「……言えないんだ」トシオは言う。

「わかっている。凶星なんだってことは」父はうなずく。「……むかし、私も科学省に勤めていたとき、そう考えて、報告したこともあるんだ」

トシオは父の濁った目を見つめた。父はゆっくりと頭を振った。悲しみとあきらめの表情が浮かんでいる。

「——だが」父は口を大きく開いた。その口の中には前歯が無いことにトシオは気がつく。

「だめなんだ。そんなことをしても！」父は前歯の無い口を開いて吐き捨てる。「世界中の火山を同時に噴火させ、アマゾンの森林を焼き払って大気中の二酸化炭素を少々増やそうが効果なんぞ無いんだ！——むしろ、この爆発的な寒冷化をさらに加速する可能性があるんだ

ぞ！」父は言った。

激高した父の言葉が、トシオにある記憶を呼び起こさせた。それは、「母」に関する、とりとめもない記憶の断片であった。トシオは目を閉じる。父が怒鳴りながら一人の女性の首に両手をかけている光景が稲光のように脳裏を照らす。次の瞬間、光景が変わり、父に手を引かれ、長い難民の列に紛れて歩く幼い自分の姿になった。

「どうした、トシオ？」

父の声が響く。その声に心配げな色があることにトシオは安堵を覚えた。

トシオにはその後の記憶があまりない。

父の言葉が終わるか終わらないうちに、鎮守府軍の垂直離着陸機のエンジン音が倉庫の屋根を揺るがしたのである。トシオは目を開けた。年老いた父の顔に混乱の色が浮かんでいた。

おびただしい銃声がトタン屋根に落ちる雹のように響く。怒声の塊が近づいてくる。鎮守府軍から奪ったらしいサブマシンガンで武装したコロニーの男たちが倉庫に入ってくる。彼らは気が違ったようにわめきちらしながら、トシオと同じように転がされている捕虜を一人ずつ射殺しはじめた。マシンガンの弾丸が身体を打ち抜くたびに捕虜たちは陸に揚げられた魚のように飛び跳ねる。トシオは目を見開いてその殺戮を眺めていた。恐怖も現実感もなかった。まるでムコウダ・トシオというぼやけたレンズで深海の出来事を覗き込んでいるような気がした。

「よせっ」一人の男が銃をトシオに向けたとき、老いた父は老人とは思えない素早さでその男に覆い被さるようにして銃を奪おうとした。タタタタ。軽いマシンガンの音がして、父の背中から胸を貫通した弾丸が飛び出していくのが見えた。

父が崩れ落ちるように床に膝をつくのとはほぼ同時に、マシンガンを手にした男の頭が横に揺れ、こめかみのあたりから白いものが飛び出す。トシオは顔を上げ、父を凝視した。老いた父は目を大きく開け、肩で息をしながらトシオのことを見つめていた。その背後でおびただしい

鎮守府軍の兵士たちが倉庫を埋め尽くすのが見えた。

五発もの銃弾を受けたにもかかわらずトシオの父は深夜まで生きていた。トシオは自分自身の治療が済むと、ずっと父のそばにいた。「……この寒冷期を**確実に終わらせる方法**がたったひとつある……」父は、酸素吸入器を外させて、かすれた声でトシオに言った。

「どうやって？」トシオは少年の頃のように父に尋ねた。

「……逆**にすべてを凍らせるんだ**」大切な秘密を打ち明けるかのように父は言う。

「すべてを？」

「そうだ……。赤道まで氷床に覆われる『**全球凍結**』を……。より早く」

「なぜ？」トシオは言った。

そのとき、父はトシオの目を見て、口元にさざ波のようなかすかな笑みを浮かべた。

「……世界のすべては千メートルもの分厚い氷に覆われる……。宇宙から見ると……。地球は

真っ白な雪の玉に見えるだろう。そして、その氷床の重みが、火山活動を刺激するんだ……。

いくつかの火山は、分厚い氷を突き抜け、水蒸気や二酸化炭素を大気に放出するだろう。――

どうなると思う？」

「どうなるの？」トシオはやさしく言った。

「普通の地球なら陸地や海洋がほとんど吸収するはずが、氷で覆われているために、そうなら

ないんだ。……だから、わずかな量でも数倍もの『**温室効果**』をもたらし、急激に気温を上昇

させる」

「あ」トシオは声を上げる。トシオの感心したようすに父は満足げな表情を浮かべて、こうし

めくくった。

「……寒冷化に向かって暴走した地球が今度は温暖化に向かって暴走するんだ。……二三十年

もしたら……地球の平均気温はマイナス五十度からプラス五十度にも達するのさ……」
「でも、それって……」父の話に引き込まれたトシオは声をかけたが、父からの返事は、もう、なかった。

父の臉を閉じて、病院の外に出た。終わらなき冬の夜は明けていた。灰色の空の向こうに浅間山が見えた。

浅間山の噴火実験が終わる前に除隊したトシオは、沖縄のコロニーに移り住み、生涯をそこで過ごした。食料事情はますます厳しくなり、わずかな軍人恩給ではぎりぎりの生活だったが、餓死していった多くの日本人よりはましだった。

世界の活火山を同時に噴火させ、寒冷化を食い止めようという壮大で愚かしい試みが行われたのは、五つのコロニーが壊滅した浅間山の実験後、七年目のことだった。

広東省人民政府の支配下にあるインドネシアの六つの火山と、計画に賛同した新南米連邦の支配下にある中米の五つの火山が数千発もの核爆弾により強制的に噴火させられたのである。

しかし——数万人の直接的な死者と、そのあとに続く農耕地の壊滅的打撃による数十万の餓死者という犠牲にも関わらず——寒冷化を食い止めるという効果は全く無いように見えた。「責任の追及」という名のもとに血なまぐさい粛清が行われ、為政者たちのリストがほんの少し書き換わっただけだった。

トシオは、臨終間際の父の言葉を思い出した。除隊してから自分なりに調べてみたのである。そして、赤道も含む地球のあらゆる地域が分厚い氷に覆われる『全球凍結』は意外にも簡単に起こりうるということを知った。氷床が緯度三十度を超えたとき、地球の反射率アルベドの飛躍的な高まりにより、さらに爆発的な寒冷化が起きて、一気に『全球凍結』をもたらすのだ。そして、それは——全地球的な寒冷化は——**確実に終わるのである。**数億年前と同じように。

トシオはさらに年をとり、地球はより寒くなり、人々は寛容さを失った。世界は氷床と砂漠に二分されたかのようだった。

あるとき、コロニーの中の狭い部屋を片付けていると、ぼろぼろになった父の手帳を見つけた。トシオは鉛筆をとり、何度も読み直したアリたちの物語に、こう書き加える。

——寒さはアリたちをむしばみ、さらに巣穴どうしの殺し合いにかりたてるのだった。

あるとき、一部の賢いアリが、この寒さから抜け出す妙案を思いつく。赤道付近にある並んだニキビのような活火山たちを一斉に噴火させ、地球を暖めようというのである。

慈悲深い神がもたらしたかのようなアイデアだと思いついたアリたちは、さっそくそのとうもろもない計画を実行にうつして、事態をさらに悪化させてしまう。多くのアリたちが死に、巣穴は怨嗟の声で満ちるのだった。

……一匹のアリがいた。父親に見捨てられ、命を助けられた、みすぼらしいアリだった。足が一本もげていて、家族もなく、未来もなかった。

そんなアリが、あることに気がついた。あのアイデアはやはり神からもたらされたものではないか、と。この地球のすべてを凍らせ、また解かし、生きとし生けるものを創りなおそうという神の隠れた意図が、従順なアリたちをつき動かしたのではないか、と。

証拠はなかった。しかし、それが真実ならば、神にとっては数度目のみわざなのだった。

答えを知るすべはなかった。ちっぽけなアリの一生は火花よりも短いのだから。足のもげたアリは口をつぐんだまま、闇の中へ、そっと消えていく。

やがて、氷床は緯度三十度を超え、まるで大きな貝がパタンと閉じるように、世界は一瞬で分厚い氷に覆われた。

みじめなアリの父親が死ぬ間際に言ったように、すべてが凍り付いてから数百万年という時間の後に地球は自らの力で氷を解かし、大気を暖めた。いや、「暖める」どころではなかった。季節は「春」を飛び越えたのだ。

——そして、アリたちのいない夏がやってくる。

冬のアリ

完